

令和7年度 FHU データサイエンス教育プログラム

科目に関する自己点検・評価

令和8年5月

藤田医科大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム委員会

【自己点検・評価について】

■ 自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等 <<学内からの視点>> (プログラムの履修・修得状況について)

各学部の学務課（または教学課）において履修・成績状況の継続的な把握を行い、問題のある学生については教務委員会と連携し、個別対応が実施されている。また、年度末には各科目責任者から提出された自己点検票を基に、藤田医科大学 数理・データサイエンス・AI教育プログラム委員会（以下、「本委員会」と呼ぶ）において、横断的な検証と改善検討が行われており、必要に応じて科目責任者へフィードバックが行われている。

【評価結果】 A

履修・修得状況の把握およびフォロー体制は適切に機能している。

(学生アンケート等を通じた学生の理解度について)

すべての科目において、受講生は講義ごとに授業評価アンケートに回答を求められ、各科目の講師は随時、その評価結果や学生からのコメントを確認できる。さらに、アンケート結果は教育推進本部会議においても点検・評価され、その結果をもとに改善や向上に向けた提言がなされる。その提言をもとに、本委員会で具体的な施策を考案し、科目担当教員にその実践を依頼する仕組みが構築できている。また、各科目において理解度向上に向けた多様な工夫が実施されている。講義と演習を組み合わせた構成は全体的に定着しており、理論と実践を往復する教育設計が広く採用されている。一方で、各科目責任者から提出された自己点検票によると、ほぼすべての科目において、学生間の理解度・技能差の大きさが共通課題として指摘されている。

【評価結果】 B

学生の理解度の把握や、理解度向上に向けた取り組みは充実しつつあるが、個人差への体系的対応と学習成果の定量的把握が課題である。

(学生アンケート等を通じた他学生への推奨度について)

本プログラムは多くの科目が必修科目として位置づけられているため、推奨度調査は体系的には実施していない。ただし、演習・グループワーク・発表等の参加状況から、学生の主体的な関与は一定程度確認されている。今後は、客観的な評価のために、定量的な指標に基づく調査が望まれる。

【評価結果】 B

現行の枠組みで一定の把握は可能であるが、定量的な指標の導入が望まれる。

(履修者数・履修率向上に向けた計画の達成状況について)

本プログラムは事実上の必修科目により構成されており、履修率は制度的に担保されている。本年度も計画通り履修は進んでいる。一方で、各科目の自己点検から、履修率とは別に「学習成果の質」に関する課題が明確となった。特に、演習課題において自力で取り組めない学生の存在や、基礎理解の不足が複数の科目で指摘されている

【評価結果】 B

履修率は問題ないが、学習成果の質保証に向けた取り組みの強化が望まれる。

(数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶ意義」の理解について)

各科目において、実践的な学習機会の提供が進んでいる。講義と演習の組み合わせや、実データの活用、グループワークなどにより、学習内容を実際に活用する経験が提供されている。また、看護研究方法論や保健統計学演習などでは、卒業研究や実務への接続を意識した教育設計がなされており、学習の意義を理解させる工夫が見られる。一方で、データサイエンスと臨床・専門分野との関連性を実感しにくい学生が存在することや、基礎的内容の理解に時間を要するため応用的内容に十分時間を割けないという課題も指摘されている。

【評価結果】 B

実践的教育により学習意義の理解は進んでいるが、専門分野との関連性の明確化と発展的内容の充実が課題である。

(内容・水準の維持・向上および分かりやすさの向上について)

本年度は、各科目において以下のような改善の方向性が明確に示された。

- E-learning や事前学習の活用による反転授業の検討
- レベル差に対応した教材・課題の整備
- 繰り返し学習による知識定着の強化
- TA や教員による個別支援体制の強化

これらの取り組みにより、教育内容の継続的な改善が図られている。

【評価結果】 B

改善の取り組みは活発であるが、体系的な学習支援設計と時間制約への対応が今後の課題である。

■ **自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等** <<学外からの視点>>
(教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価について)

各学部学務課において卒業生の進路先は把握しており、調査の必要があれば、IR 推進センターや各学部の IR 分室に本プログラムの修学が就職先でのどの程度役立ったかという調査は可能な体制にある。さらに、本学付属病院にも多くの卒業生が在籍しており、彼らの活躍状況や病院での評価を容易に調査できる体制にある。

【評価結果】 B

調査体制は整備されているが、今後は実績に基づく評価の実施が望まれる。

(産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見について)

附属病院や関連医療機関との連携に加え、産業界や自治体との意見交換の枠組みは整備されている。今後は、現場ニーズを教育内容へ具体的に反映する仕組みの強化が求められる。

【評価結果】 B

外部連携の基盤は整っているが、教育改善への具体的反映の強化が望まれる。

<評価レベル>

A：問題なく実施されており、優れた点が認められる。

B：軽微な課題も残されているが、概ね問題なく実施されている。

C：大幅な改善が求められる。

【まとめ】

本年度は、各科目において講義と演習を組み合わせた実践的教育が定着し、プレテスト・小テストの導入やグループワークの活用など、学習効果を高める具体的な取り組みが進展した。また、生成 AI や e-learning の活用など、新たな教育手法の導入に向けた検討も進められている。

一方で、複数の科目に共通する課題として、学生間の理解度・技能差への対応、学習成果の定量的評価の不足、および専門分野との関連性の明確化が挙げられる。また、授業時間の制約やカリキュラム変更に伴い、効率的な教育設計の必要性も高まっている。

今後は、これらの課題に対応するため、小テストの活用等により基礎的理解の底上げを図るとともに、理解度に応じた段階的な課題設計を検討し、その内容を各科目において共有・活用する。また、各専門分野との関連性をより明確にするため、臨床や実務に関連した事例の導入や、既存科目間の接続を意識した教育内容の見直しを進める。加えて、授業時間の制約に対応するため、e-learning 等を活用した反転授業の導入を検討する。これらの取り組みについては、次年度以降の自己点検・評価においてその効果を検証し、継続的な改善につなげていく。